

大友氏四百年の時代区分と動き

【鎌倉幕府期】

12世紀末、武家政権を確立した源頼朝。草創期の頼朝を支えたのは鎌倉御家人と呼ばれる武将たち。大友能直は彼らより一世代若いが頼朝の覚えめでたく、非常に可愛がられた。頼朝政権安定期の建久7(1196)年に豊後を拝領し、その子孫は400年にわたり豊後を治めた。

13世紀後半の蒙古襲来の折には、鎮西奉行として少弐氏と共に3代大友頼泰が総指揮官として蒙古を撃退した。そして豊後に土着し、勢力を扶植していく。

【南北朝期】

14世紀中葉、後醍醐天皇によって建武の新政が始まる。足利尊氏はそれを機として政権奪取を目論み蜂起、南北朝時代が始まる。九州は南朝方が多かったが大友氏は北朝として足利氏に協力した。その室町幕府の草創期を支えたのが西国九州では大友氏であった。それ以降、足利幕府を手本として豊後を中心に九州北部の治世に専念した。しかし、南北朝末期に大内は大友の支配地に干渉するきっかけを掴んだ。

【室町幕府期】

その間、大陸との海外貿易を大内氏と競いながら行った。時には協力し、時にはライバルとして、さらには幕府との三すくみ状態も生まれた。海外に目を向けたのは西国大名であり、島津氏は主として倭寇として名をなしたが、大友氏は主として勘合貿易を行った。勘合貿易と言えば幕府以外大内氏が語られるが、大友氏もそれに匹敵する一時期があった。

15世紀にはいって足利幕府は室町(北山・東山)文化を花開かせるが、その裏で力が徐々に衰えをみせはじめる。幕府の力で存続してきた全国各地の守護大名も精彩を欠き、在地領主である国人衆が頭を持ち上げ下克上の時代が始まるのである。

【日本戦国期】

日本の中央、五畿内の有力武士が身内のお家騒動を拡大させ、將軍家まで巻き込んだ。幕政を壊滅し、將軍を傀儡化すべく動き出して勃発したのが応仁の乱である。九州では五畿内の争いに直接巻き込まれることはなかったが、大内のみはキャスティングボートを握り重きをなした。そして大内は大友の領国に本格的に干渉し始めた。

15世紀末から16世紀前半は、大内との関係は良きにつけ悪しきにつけ、深い関係となっていた。そして16世紀中葉、大内はその支配下にあった毛利から滅亡させられた。ここに大友宗麟と毛利元就の10年(13年)戦争が始まるのである。

この毛利と大友の九州北部の争奪戦は、信長のデビュー時にあたり、五畿内において信長が天下布武を掲げ戦っていた時期に勝るとも劣らぬ合戦絵巻が繰り広げられていたのである。同時に宣教師が多く来日し、日本はポルトガルとスペインという二大強国による植民地化という国家戦略に組み込まれ、好むと好まざるとに関わらず、日本が国際情勢の一端に関与していた時代でもあった。

日本の戦国時代は、ヨーロッパの動きなしには語れないのが真実である